

三 吉谷覺寿の印度哲学講師着任の経緯

一八八一（明治十四）年、東京大学文学部では、哲学政治学及び理財学科から哲学科を独立した学科とし、正式科目の一つとして「印度及支那哲学」を置いた。印度哲学という科目は、それまで選択科目とされていた「仏書講義」を改称したものであり、実質的な内容は仏教学であつた。また、翌年には、「印度及支那哲学」を含む「東洋哲学」という科目が増設されており、印度哲学と称された仏教学は、東洋哲学というカテゴリーの中に位置づけられることになる。

印度哲学の初代講師は、原坦山（一八一九～一八九二）である。その後、吉谷が講師に加えられた経緯については、東大総理であつた加藤弘之（一八三六～一九一六）に、東京小石川戸崎町の念速寺の住職が「坦山翁は禅門の悟道の方にて、教相学者にあらず。殊に天台学などは全く学びたることなき人なり。因て今一人教相専門学者の増聘せられ度由を申上げ」（井上円了「加藤老博士に就きて」『東洋哲学』第二二編、第七号、一九一五年、二ページ）吉谷を紹介したとされている。

原は、儒学とともに漢方医学を学んだ後、曹洞宗の門に入つた禅僧である。また、念速寺の住職の指摘とは異なり、実際には比叡山に入り天台教学も学んでいる。しかし、その後、解剖学や神経生理学を学んだ坦山は、極めて独創的な医学的仏教理論を構築する。それは、従来の伝統的な仏教理解とは大きく異なるものであつたため、近藤は、仏教の正当な教相学者を加える必要があるという提言をしたものと思われる。

ところで、明治の仏教界は、廃仏毀釈を始めとし、キリスト教の解禁、哲学や自然科学の導入による合理的思考の重視、神道国教化への動きなどにより、その存在は危機的状況に置かれていた。こうしたなか、

東京大学という最高学府において、仏教が正式科目の一つにされたということは、将来、国家を担う学生たちにとって、仏教は学ぶべき分野であると認められたことを意味する。また、仏教はインドの哲学であり、東洋哲学の一つとみなされたことにより、仏教は西洋哲学と同等に位置づけられたといえる。そこで吉谷は、このようなカリキュラムの改正を歓迎し、仏教復興の足掛かりの一つとなると考え、講師の職を引き受けたものと推測される。

四 『天台四教儀』の講義目的と方法

吉谷は『天台四教儀』に先立ち、『八宗綱要』の講義を行っている⁽¹⁾。『八宗綱要』の著者は、鎌倉時代の擬然(一二四〇～一三二一)であり、仏教が伝播した歴史と、八宗(瑜伽宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・天台宗・華嚴宗・真言宗)の歴史及び教理が簡潔に説かれたもので、八宗の概要を知ることのできる入門書とされている。したがって、「教相専門学者」として東京大学に招かれた吉谷は、まず、仏教の歴史と各宗派の教理についての基礎知識を習得させるため、『八宗綱要』を講じたと考えられる。

一方、『天台四教儀』は、高麗の諦観(？～九七一)が執筆したもので、鎌倉時代に誕生した日蓮宗・浄土宗・浄土真宗などの原点となった天台教学の入門書である。先に述べたように、原はこの天台教学を学んでいないとされ、吉谷の招聘へとつながったのである。そこで吉谷は、『八宗綱要』について講じた後、八宗のなかでも日本仏教の母体となった天台教学に関する知識の修得を目標とし、『天台四教儀』を講義内容として選んだものと思われる。また、天台教学は、修行のみならず教説の理論的究明を肝要としている。したがって、吉谷は天台教学を通じて、仏教は西洋哲学に匹敵する理論的内容をもつものであることを示